

かほくがた

河北潟湖沼研究所通信 Vol.7 No.2



いしかわ環境フェア2001に出展



環境保全活動の担い手である県民、企業、学生・生徒及び行政が活動状況を紹介し、各主体が啓蒙しあう場として、いしかわ環境フェア2001が去る8月25日～26日に石川県産業展示館3号館で行われました。入場者数は主催者発表で8,500人でした。また、出展者数は例年にくらべ少なめで、大学や市民団体の参加が目立ちました。

河北潟湖沼研究所は正面入り口に2ブースのスペースを確保して、パネルや植物の現物展示を行いました。メインテーマは「変わりつつある河北潟の水草相」と題して、蓮湖と呼ばれたかつての水草の宝庫の時代から、干拓による植物相の変化、さらに急変する最近の傾向について水草の変化を説明しました。そして、身近な植物については水槽やプランターにて現物展示を試みました。

また、活動の紹介では、内灘砂丘のニセアカシア間伐材による炭焼き報告や研究所の報告書を展示しま

した。さらに、カレンダーの紹介やボランティア・スタッフの募集まで、広い展示スペースを使って盛り沢山の展示を行いました。

場所が良かったためか、入場してくる見学者はほとんどブースの前や横を通って来て、展示品に目を向けてくれました。ただし、ブース内に入ってじっくりパネルに目を向けてくれるのはかなり少なく、展示の難しさを実感しました。

ブースに入ってくれた学生や年配の方々が興味深そうにパネルや展示物を覗き込み、パンフレットやチラシを手にとってくれれば、自分たちの活動に責任を感じてしまいました。

なお、展示した水草は最後に処分することになりアサザをいただきましたが、自宅の水槽でクロメダカとともに元気に成長しています。

(友の会ボランティア・スタッフ 櫻井)

河北潟学習

学習コーナーでは4コマ漫画のテーマによって紹介しています。



いま河北潟に行くとカモ（鴨）の群れがたくさんみられます。夏場これらのカモ類は北海道やさらに北方で生活しています。河北潟の湖面でたくさんのカモが泳いでいるのに目をかけてみると、くちばしで水面近くの水をしきりに噛み（水中のプランクトンなどをこしとっている）ながら進んでいるものや逆立ちしてお尻の方だけを水面上に出しているもの、顔を背中側に回して休んでいたりと、追いかけているなどいろいろな動きが見られます。そうしてしばらく観ていると水の中に突然潜るキンクロハジロやカイツブリの仲間が目いきます。キンクロハジロは同じカモの仲間ですが、貝類を主食としており水中に潜ることができます。沈水性の水生植物を食べるホシハジロ、魚や甲殻類を主に食べるミコアイサなど潜水するカモの仲間も数種みられます。カイツブリの仲間は水に潜るのが巧みで、すぐに水の中に消えてしまいます。ゆっくりと観察したいときには潜った後にどこにでてくるのかと水面上を見回します。河北潟の広い水域にはそのほかにカワウやカモメの仲間、アオサギ、ミサゴという魚を主食としているタカなども数多くみられます。

通常多くの野生生物は、草木や石などの周辺環境にとけこめるような体色をしています。一種の擬態（ぎたい）です。自分の存在を隠す保護色として機能しているようです。敵から身を守り、餌を捕まえるためには、目立つ姿をしていると生存に不利になるようです。そういった保護色を持ち、警戒心のある野生生物を目にしたいときには見つけようという意志が大切であるように思います。

砂礫地や水田、湿地に生息するシギ・チドリ類は、背中側が灰色や焦げ茶色をしているものが多く、地面の砂泥に溶け込んでいるためとても見つけにくい鳥です。イカルチドリやコチドリなどチドリの仲間はとても動きが敏捷で、足が見えなくなるくらいの速さで走ります。急スピードで走っているのに関わらず、急停止することができ、チャカチャカと急発進急停止を繰り返すようにして動きます。そして危険を感じたときにはぴたりと止まり、見事に擬態します。視力のいいタカの目をごまかさなくてはならないのだから大変だと感じます。チドリの仲間は、河川敷、荒れ地、水田、畑など開けた空間の地面の浅いくぼみに巣をつくり、地面のちょっとしたくぼみにそのまま産卵することもあります。そんなところに産み落とされる卵の模様も砂地の色をした保護色となっています。

河北潟は、初夏からさえずりが聞かれるヨシキリやカウ、夏のヨシ原にねぐら入りするツバメの大群、秋に数多く飛来して越冬するガンカモ類やタカ、渡りの時期にみられるシギ・チドリ類など野鳥の宝庫として知られ、探鳥地としても有名です。広大な潟と農地が、多くの鳥たちの生活を支えています。

（生物委員会 川原奈苗）

カレンダー「鳥たちの河北潟」に掲載された写真

2002年カレンダー「鳥たちの河北潟」では、河北潟の鳥たちの活き活きとした表情が撮影されています。河北潟は四季を通じて多くの野鳥が訪れる、すばらしい野鳥の宝庫です。しかし、現在の河北潟の鳥たちをめぐる状況は必ずしも楽観的ではありません。このカレンダーを通じて野鳥に興味を持った方が河北潟を訪れたときには、鳥たちとの出会いとともに、河北潟の様々な現状に気づかれることと思えます。ここでは、写真に隠された裏話をご紹介しますながら、河北潟の野鳥をめぐる状況について考えたいと思います。

上半期の表紙や2月の写真では枯れたヨシ原の上を飛翔するチュウヒが、また7月は青々としたヨシ原の中のコシキリが映し出されています。現在でも河北潟のヨシ原は、多くの野鳥に住みかを与えています。しかし、干拓が完了したころの70年代～80年代に比べると干拓地のヨシ原はだいぶ減少しました。写真のような風景も今では、なかなか見ることができなくなりました。



2月：青空が開き、風が止み、積乱雲が立つ時、河北潟は光の祝祭になる。チュウヒは輝きをまとう。

6月のチュウヒの雛は、ご覧いただいて判るとおり、撮影者が巣に近づいたところ雛が興味を持って近寄ってきた場面です。当初この写真を採用することについては、慎重論がありました。ちまたに野鳥への影響を考慮しない近接写真が多いためです。今でも、カメラマンがタカの巣の近くで粘ったために繁殖を中止してしまったという話を聞くことがあります。また野鳥の目にストロボ撮影の閃光がくつきりと写っている写真も時折見かけます。こうした写真との違いは雛の表情をご覧いただければ判ると思います。撮影者の中川さんは永年、河北潟でチュウヒの生態を観察してきた方で、この雛の親たちの行動

も熟知しています。それゆえに、繁殖に影響を与えず短時間でチュウヒの雛の無邪気な表情を撮影することができました。大胆なようですが注意深く撮影された一枚です。チュウヒへの親近感を持つ方が増えることを願い、あえて近接撮影の写真を掲載いたしました。



12月：雲は力に溢れて暗く、雪はやんでいる。チュウヒは冬を脱む。

12月の写真にはチュウヒの猛禽類らしい精悍な表情が捉えられていますが、この写真はフィルムの下側と右側を大きくトリミングしたもので、少し解像度が荒くなっています。どうしてもチュウヒの姿とともに湖岸に溜まっているゴミが映ってしまうため、ゴミの部分を取り切ったためです。最近ではクリーン作戦などでゴミが減ってきましたが、チュウヒが止まるような目立たない場所には、まだゴミがたくさん残っています。チュウヒの眼光鋭い表情も、周辺にゴミが映っていたのでは締まりません。

今回写真を提供いただいた中川富男さんについては、あとの「河北潟干拓地の魅力」をお読みいただきたいと思います。中川さんの河北潟での活動や人となり伝わる文章です。研究所主催の自然観察会では、いつも季節ごとの河北潟の見どころを教えてください、現地での解説もしていただいています。今回の企画でも、快くっておきの写真を提供していただきました。

それぞれの写真の下に付けられている説明は、研究所生物委員会の三浦淳男さんによるものです。中川さんと同じく、河北潟で鳥を追いかけている人です。写真に映し出されている鳥たちの気持ちに心伝わり、河北潟の季節ごとの情景が目浮かぶようなすばらしい説明です。

(金沢事務局・高橋 久)

お知らせ

< 情報・活動報告 >

金沢市田上町のゲンジボタルがさらに減少

これまでもたびたび取り上げてきましたが、かつてはゲンジボタルの大量発生地であった金沢市田上地区では、外環状道路建設、宅地開発事業等により環境が改変されたため、ゲンジボタルの発生が著しく減少しつつあります。研究所生物委員会が97年に実施した調査では、1日あたり最大2700匹以上の(河北潟総合研究Vol2.p11-18)のゲンジボタルが確認されました。ところが、2000年におこなった3回の調査の結果からは、生息地は8カ所へと激減し、最大発生数も200匹程に減少していることがわかりました。

今年も生物委員会の西原昇吾氏を中心にして、3回の調査を実施しました。その結果は、6月3日に4カ所で11匹の確認、6月10日に5カ所で67匹の確認、6月17日に5カ所で164匹の確認にとどまっています。

最近石川県内でも、ホタルの里づくりがいくつかの場所でおこなわれていますが、田上地区においては、再生の前に、現在残っているホタルの生息地をまず第一に守ることが求められます。一度破壊された環境は簡単には元には戻りません。今年度の調査の詳細は、ホームページ「チュウヒのふるさとかほくがた」で公表していく予定です。

2002年カレンダー「鳥たちの河北潟」完成

好評をいただきました2001年カレンダー「四季の河北潟」に続く、2002年カレンダー「鳥たちの河北潟」が完成しました。今回は、河北潟の鷹、チュウヒの生態を研究されてきた、中川富男氏にご協力をいただき、とっておきの写真を提供していただきました。

毎月ごとに河北潟の風景と活き活きとした野鳥の表情がうつし出されています。圧巻なのは2月、6月、12月及び表紙に採用されたチュウヒの姿です。この鳥の生態を知り尽くした中川氏でなければ撮ることの出来ない豊かな表情とともに河北潟でのチュウヒの生活が良くわかります。その他、ケアシノスリ(1月)、ノビタキ(3月)、ムナグロ(4月)、セイタカシギ(5月)、コヨシキリ(7月)、カイツブリ(8月)、セッカ(9月)、トウネン(10月)、コミズク(11月)それぞれが季節感あふれる写真です。

このカレンダーは、1月から6月までの上半期と7月から12月までの下半期に分けた両面使用で、携帯に便利なサイズ(閉じた状態でA5判)となっています。書き込み可能で、壁掛け用または携帯用のスケジュール帳としてもお使いいただけます。

このカレンダーは一部800円で配布しています。カレンダーの購入をご希望の方は、河北潟湖沼研究所金沢事務局(右下の枠内参照)までお申し込みください。

また、このカレンダーは、金沢市と河北郡の以下の書店でも取り扱っています。金沢市:ブック宮丸金沢南店、文苑堂書店入江店、ブックスなかだ、荒屋書店、金沢大学生協、内灘町:おきの書房、津幡町:スガイ太田店。

< 編集後記 >

最近、環状線の区域にかかっている町にさるが出没したそうです。

山を削られてさまよったのでしょうか。

気が付いたら家の前の風景が見る見る変わっていきま

した。

森は伐採され、山肌がむき出しになっています。巨大な橋脚が林立して、コンクリートの道路が空中を交錯しています。

悠々と空を舞っていた白い鷹もどこかに行ってしまいました。

たった1年間での変化です。

人が増えた、車が増えたと理由をつけて人間は自然を破壊します。

生活しているのは人間だけではないのですよね。

さるや他の生き物から見れば、身勝手な行為です。



(編集者Mより)

「かほくがた」(題字 大館小夜子)
VOL. 7 NO. 2 2001年11月1日発行
発行所 河北潟湖沼研究所友の会
〒920-0051 金沢市二口町八58
河北潟湖沼研究所金沢事務局内
TEL: 076-261-6951 FAX: 076-265-3435